紹　介

Daniel POIRION, *Le merveilleux dans la littérature française du moyen âge*, Paris (P.U.F., "Que sais-je?"), 1982

原野　昇

クレチァン・ド・トロワの作品などを読んでいくと，主人公が次々と不思議な出来事に出くわしていく。それらは主人公が体験し，解決し，耐えていかなければならない試練（アヴァンチュール）であり，作品の筋を構成する重要な要素となっている。例えば『車上の騎士』では主人公ランスロは，「危険の床」の試練を経たのち，女王がとらわれているゴール国に達するために，「水中の橋」かあるいはさらに危険な「剣の橋」を渡らなければならない。ランスロは結局後者を選んでゴール国に達する。また『聖杯物語』ではペルスヴァルが，有名な聖杯の行列を目撃するという不思議な体験をし，この場面がこの作品全体の重要なポイントとなっている。

本書は，パリ第四大学教授のダニエル・ポワリオンが，このような中世文学にみられる「驚嘆事（メルヴェイユー）」に焦点をあて，この観点から中世文学を見直し，それぞれのジャンルで扱われている「驚嘆事」の種類や性格の相違，またそれらの取り扱われ方の相違などを概括的に紹介したものである。

まず序において，「驚嘆事（メルヴェイユー）」という術語を定義することから始めている。「不思議なこと（エトランジュ）」と「驚嘆事（メルヴェイユー）」と「幻想的なこと（ファンタスティク）」は，いずれも同一現象を異った観点から言い表わしたにすぎないとする。すなわち，エトランジュというのは心理学的観点から述べたものであり，ファンタスティクは芸術の分野で言われることである。それに対し，メルヴェイユーは文学の領域において用いられる，と著者は考えている。その同一の現象とは，作者と聴衆（読者，観賞者）に共通の基準（通用価値）と他の世界の特性との間の「文化的距りを表わしたもの」のことである。また「メルヴェイユー」ということばの表わす意味

は，まず「驚き」の感情であり，次いでそれに，恐れ・畏怖，賞讃・感嘆，魅了など様々なニュアンスが付随しているものである。「文化的距り」というのを言い直せば，「現実がふだん提供することができない，欲望の対象や恐怖の対象に出合ったときの驚き」ということになる。そこにはケルト世界，ゲルマン世界，ギリシア・ラテン世界，東方世界の異質文化の衝突，競合，混こうなど，文化の積層現象が考えられることを示唆している。

以上のような考え方を基本におき，第1章，宗教的想像，第2章　驚嘆事と戦争，第3章　古代神話，第4章　ブルターニュもの短詩，驚嘆事小話，第5章　12世紀ブルターニュもの物語（ロマン）における神秘と驚嘆事，第6章　13世紀における驚嘆事の諸相，第7章　中世末期における民間伝説と宮廷的秘教主義，そして最後に結びとして，驚嘆事の上演，という章をおいている。この目次を見ただけで，先にも述べたように，著者が驚嘆事の問題を，時代を追って，またジャンル毎に分析しているということが分かるであろう。すなわち，第1章では聖者伝などに見られる聖性の奇蹟の問題と，キリスト教のオデュッセイアと呼んでもよい『聖ブランダンの航海』がとりあげられている。第2章では武勲詩とアレクサンドル物語群が扱われ，前者に見られる登場人物の超人的活躍や神の力添えによる奇蹟的活躍と異文化の敵（例えばサラセン人）との出合いにおける異国的驚嘆事が分析され，後者では，奇怪な人間・動物・自然など，世界叙事詩的驚嘆事として説明されている。第3章では『テーベ物語』，『エネアス物語』などいわゆる古代ものがとりあげられ，そこにみられる古代ローマ世界と，神話とがその変換の問題も含めて驚嘆事の一様相として説明されている。第4章では，マリー・ド・フランスやその他の作家によるブルターニュもの短詩や小話が扱われている。このジャンルでは，次章で扱われるものと並んで，驚嘆事がひじょうに重要な役割を果している。著者は短詩の構造や驚嘆事小話の性格を物語（ロマン）やファブリオーと比較したりして述べているが，これらの作品によく出てくる妖精を母（女）権制社会に関連づけ，宮廷風恋物語などを男性主体的文化として前者に対立させている点などは示唆に富むと思われる。第5章では『トリスタンとイズーの物語』とクレチャン・ド・トロワの諸作品がとりあげられ，聖杯関係の作品もまとめて扱われている。この章で扱われている作品は前章のものと並んで，驚嘆事が重要な役割を演じているものばかりである。著者はこの章では驚嘆事の具体例を示し，その種々相

や果している役割などを分析的に説明している。第6章では，13世紀における驚嘆事の諸相として『クーシーの城代』などに見られる「心臓を食べる話」や，魔術師メルランや，『ユオン・ド・ボルドー』や『オーブロン物語』に登場する不思議な力をもつ人物オーブロンなどがとりあげられている。続く第7章では，一角獣を従えた婦人のテーマや，メリジーヌ伝説など，中世末期における民間伝説起源の驚嘆事の特徴を示している。そして最後に奇蹟劇や聖史劇など演劇で扱われる驚嘆事をまとめてとりあげている。

以上のごとく本書は，マリー・ド・フランスの短詩やクレチャン・ド・トロワの作品などに典型的に見い出される，この世の尺度でははかれない，いわゆる超現実的不可思議事のみでなく，フランス中世のあらゆる時代のあらゆるジャンルの作品を，広い意味での驚嘆事という視点から，通史的に眺めなおしたものである。これはこれとして，興味深い試みであると思う。本書の収められている双書の性格からして，これ以上は望むべくもないが，本書の視点をヒントにして，具体的作品の種々の驚嘆事を詳細にかつ徹底的に分析した，本格的研究が待ち望まれるところである。